

景 / 観 / 文 / 化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう

<http://www.tda-j.or.jp>

2018-06-01

特集 継続していく景観

目次

P1

■巻頭

「都市景観と都市高速道路 維持管理の視点から発想されるデザイン」
／(写真・文) 須田 武憲

P2～3

■特集：追悼 高橋徹さん

曾根幸一／八木健一／小林正美／
渡辺治郎／井上洋司

■ランドスケープ事情

「豊かな「日常生活」の場としての
広場」
／熊谷 玄

P4～5

■TDA NEWS

《まちを見る、まちに聞く活動事例》
「市民を対象とした公共製品の見本市の開催」
／伊藤 登
「賑わいを測る」
／中野 竜

P6

■シリーズ：地域から

「北本市」その2
／岡野 高志

■景観ビジネス最前線

／(株)コトブキ

■ホワイトボード



写真：首都高速道路3号線神泉町交差点の恒久足場

都市景観と都市高速道路 維持管理の視点から発想されるデザイン

都市景観にしっかりと根をおろし、親しまれているインフラといえば都市高速道路があげられる。都市高速の中でも首都高速道路（以下首都高）は最も歴史が長く、2020年のオリンピック・パラリンピック開催を見据えて、都市景観に配慮した取組みも数多く行われている。

首都高のホームページによれば昨年の横浜北西線の開通によって新規路線の整備はほぼ完了し今後は永続的な「維持管理」の時代に入ったといえる。維持管理について見れば、極めてシステム化された構造物の「点検と補修」技術を駆使して道路の安全と安心を日々支えており、膨大な人的資源と作業時間を投下することによって、構造物の寿命を延ばすために全力が注がれているのだ。

これらを鑑みると、これからは都市高速の付属施設デザインのあり方も変化していくと考えられる。桁カバーや防音壁などの塗装塗り分けや被覆するだけの単純な修景的デザインから、維持管理の視点から発想されるデザインに置き換わっていくだろう。写真は渋谷区神泉町の交差点に設置された恒久足場と呼ばれる桁下の付属施設である。道路・鉄道交差点などで容易に点検できず、構造物の損傷が第三者に多大な影響を与える可能性が高い箇所に、機能と景観を考慮して取り付けられている。従来はそうした場所で点検・補修が必要になった場合、仮設の足場が長期間展開していたが、これからは恒久足場の中で安全で快適な点検と補修が可能になる。外観は透過性のある美しいルーバーで構成され、その断面形状を工夫することでボルト等の誤落下を防いでいるという。こうしたインフラの老朽化を防ぐ維持管理機能を持つ付属施設が環境デザインと結びつくことによって、安全性と効率性を高めると同時に豊かな都市景観に寄与する時代はすでに目前に迫っている。

(株)GK設計：代表取締役 須田 武憲

追悼 高橋徹さん

TDA正会員・運営委員

※当機構での役歴

2007/6/27～2007/8/31 理事
2007/9/1～2011/8/31 副代表理事
2011/9/1～2013/8/31 代表理事
2015/9/1～2017/8/31 副代表理事

去る2018年5月5日、当機構の正会員・高橋徹さんがお亡くなりになりました。72歳でした。高橋さんは、当機構設立時より代表理事、副代表理事など常に活動の中心的存在として活躍しておられました。

本紙では緊急特集として、高橋さんとの縁の深かった方々のお言葉をご紹介しますことと故人への追悼に代えることとし、会員の皆様とともに高橋さんを偲びたいと思います。

高橋徹さんの略歴

1945年富山県生まれ。東京工業大学大学院建築学専攻修了後、1972年(株)日本設計に入社し、都市計画部長、名古屋支店長、常務取締役などを歴任。東京都江東防災拠点再開発、相模大野駅周辺整備事業、代官山地区再開発、武蔵小杉駅南口再開発など国内外のプロジェクトに携わる。2010年日本設計退職後、クリエイティブスタジオを設立。当機構の他、JUDIやLLPシビックデザイン、LLPまちテラスなどの活動にも参加された。



ネパールで村の実測をまとめる高橋徹さん [2009/4]



ネパール・ナウリコット調査団のメンバーと [2009/4/9]



韓日都市デザイン交流会(シフン市)にて [2016/10/7]

1 徹さんの再開発と山歩き

曾根 幸一

芝浦工業大学名誉教授/TDA顧問

高橋徹さんと最初にお会いしたのは、日本設計の伊丹勝さんに紹介頂いてからだ。私は大学を退任したところで、八木健一さんに誘われてこのNPO法人の立ち上げを手伝っていた。学識的な人集めが必要だったので知古に頼ったのだ。氏は再開発問題のベテランで、間もなく退社する時期だった。この団体ができて最初の活動が「景観講座」だったが、土田旭さんと高橋さん、それに私の3人が最初に3度ずつ講話した記録がのこっている。以来この団体には欠かせない人になって三代目の代表もお願いした。お酒する機会も増えたし一緒に旅も何遍かあった。氏は根っからの山男である。ネパールの高峰ダウラギリと徹さんが、ダブってみえてくる。ご冥福を。

2 高橋徹さんのハニカミ笑い

八木 健一

八木造景研究室：代表/TDA監事

私が高橋徹さんと初めて出会ったのは、バブルの頃に京急川崎駅周辺の再開発プロジェクトでした。

その後2005年から当NPOの立ち上げに参加していただき、当初から事務局長だった私を支えてくれました。第6～7期(2011～13)の二年間は代表理事として

ランドスケープ事情

豊かな「日常生活」の場としての広場



学校帰りの子供達が広場のテーブルで宿題をしている。



子連れで来た父親が思わず友人と話し込む場面が見られた。

「左近山みんなのにわ」は、4,800戸約10,000人が暮らす左近山団地の管理組合が所有し、自ら整備した広場だ。竣工から約50年が経過した左近山団地では、住民の高齢化と空き家の発生などが顕在化しているが、大規模な建て替えの話は具体化していなかった。そこで「住民が、自ら建て替えをすることなく団地を再生すること」を目指し、「外部空間の整備」と「空き家の利活用」を柱とした取り組みをはじめた。

その手始めとして、「団地の中にあるあまり使われなくなってしまったプールを広場として整備する団地再生プラン」を、管理委員会が主催者となってオープンコンペを開催した。こうしたオープンコンペは全国でもほとんど見当たらない。このコンペに、我々は、団地の豊かな緑空間を公園として描きなおす「左近山団地パークプロジェクト」を提案して採用された。

左近山団地ができた頃、この団地に住む人々は働き盛りで毎日朝早く家を出て夜遅くまで働いていた。日中、左近山にいるのは、専業主婦と子供達くらいのものであった。しかし、今は、その人たちも定年を迎え、人生の多くの時間を左近山で過ごしていて、「日常の居場所としての団地のあり方」が求められている。また、左近山団地の未来を考えた時、この公園のような環境と生活のしやすさは、子育て世代にこそふさわしく、彼ら(彼女ら)に左近山の魅力を伝えるためにも、左近山での暮らしを描いていかなければなら

多大なご尽力をいただきました。

彼は東工大時代にワングル部だったと記憶しており山男的なガッチリ体形でしたが、ハニカミ笑いを浮かべながら話す姿が眼に浮かびます。10年ほど前、奥様に先立たれたと聞きましたが、今頃はあちらで再会して仲睦まじくしていらっしゃるのではないのでしょうか。合掌。

3

高橋徹さんへの想い

小林 正美
明治大学副学長/TDA正会員

高橋徹さんとは、土田さん、曾根さん、吉田さん、山内さんなどと共に、2009年にネパール調査旅行でご一緒させて頂いた。カトマンズからポカラに飛び、晴れの日しか飛ばないという小さい飛行機でジョムサムという山岳都市までたどり着き、そこから車で何時間もかけて、マルファ、ツクチェなどの集落をめぐった後、最終的に丘の上にへばりついたようなナウリコット村に着いた。ここでは、農業・牧畜と日々の生活が直結した極めてシンプルなコミュニティが展開されており、村の人たちは明るく自律的な生活を送っていた。当時は、ドローンもなかったので、竹やりをつないでカメラを高く立ち上げ、苦労して上空から街並みを撮ったり、スケッチを描いて寸法をできるだけ正確に記録した。

高橋さんは、終始丁寧にネパールの歴史や魅力を説いてくださり、山男としての格

好良さを示してくれていた。その後、奥様を亡くされた後もネパールには通い続けておられたと聞くと、最後まで山を愛された方であった。その後、TDA全体でナウリコットプロジェクトを立ち上げようと旗をあげたが、結果的には高橋さん個人のプロジェクトになってしまったのが大変残念である。

話は変わるが、一度、高橋さんからお手紙を頂き、ご自身が設計された新潟県南魚沼にある国際大学のキャンパスについて、明治大学から資金提供を得て、何とか健全に存続させたいというお話を頂いた。当方も若干責任のある立場にあったので、曖昧な態度をとったままご返事をせず、いずれは一緒にキャンパスを案内して頂きたいと考えていた。しかし、あまりに早くこのような事態を迎え、その思いもかなわないことになってしまった。今でも申し訳ないと思っている。合掌。

4

ネパールヒマラヤをともに歩いた「相棒」から…

渡辺 治郎
TDA賛助会員

徹さんひとりタクシーに乗り帰国の途につく昨晩夏。最寄り地方空港に向かうとき、巡礼宿の前で手を振って別れた。帰国後じきに会えるんだから…と軽い会釈でサヨナラしたはず…なのに。彼は運転手に指示しながらの発進。表情が見えなかったのがいま心残り。予定通り恙なく帰国。

北インド・ダラムサラ。ダライ・ラマの亡命政府拠点・宗教都市。ゆっくりもいいネ…と言われた小生、自身に甘えて山岳門前町を一週間徘徊。またネパールKtmにもどって観光雑踏街の路地裏に沈潜ひと月、3ヵ月ビザが切れないうちに帰国、晩秋の横浜を訪ねようと電話した。元気な声だが当惑感、入院したばかりだったか退院目途がついた頃だったか、いつもの元気な声が耳に。ことし現地で落ち合う予定はどうするんで〜す。

5

高橋徹さんの開発とは

井上 洋司

背景計画研究所：代表/TDA正会員

彼とはTDAで再開発のプロとしてはじめて知り合った。ある時“再開発でアーバンデザインは良くなるのでしょうか”と質問をしたとき、当然“YES”を期待する私に、“必ずうまくいくとは限らないね。むしろ…”とはっきりはいわないまでも、彼流の優しい口調で諭された。開発が諸刃の剣である事を長い経験から熟知していたからに違いない。その経験から開発の行くつく理想を、嘗て本紙ランドスケープ事情で、ジェフリー・パワの言葉を借りながら“建築やランドスケープとは形のデザインではなく、その中を廻る空間的・視覚的体験である”と語ってくれていた。TDAはこれを引き継ぎ、発展させていかなばなるまい。ご冥福を心中より祈る。

(株)スタジオゲンクマガイ：代表 熊谷 玄



友人と広場でお茶会。気候の良い時期は平日でもこういう風景が見られる。



子育て中の母親たちがおしゃべりできることも広場では重要な要素だ。

い。だからこそ、この広場は、年数回のイベントが出来ればよい場所ではなく、左近山に住まうすべての人々にとって、思い思いの時間の過ごし方ができる「左近山でのささやかながらも多様で尊い日常の風景が描かれる場」であって欲しいと考えた。そこで、計画に際しても時間をかけ、ワークショップを重ねながら、住民の「やりたいこと」を聞き出し、それらがきちんとできるようなしつらえを広場に落とし込むという作業を繰り返した。また、誰かにとっての「やりたいこと」は、他の誰かにしてみれば「やってほしくないこと」であったりするので、ハードのデザインだけでなく、その使い方やルール、マナーの普及なども計画に組み込んでいった。広場自体も、既存の状況を最大限生かしながら、芝生や安価な杉材で作られたデッキなど、あえて「てまのかかる広場」をみんなで作ることを提案し実現している。

完成した今、我々は広場に作ったピザ釜の使い手を育てるマイスター講習やマルシェなど、この広場でできることを伝えるための取り組みを行う組織を立ち上げ、運営に関わっている。また、「左近山団地パークプロジェクト第二弾」として団地内のみちづくりを計画しはじめた。少しずつ段階的に作りながら使っていくことで、これからの「左近山団地」での暮らし方をデザインするためだ。ランドスケープデザインとは、ただその場をデザインするだけでなく、左近山に流れる時間をデザインすることのような気がしている。

まちを見る、まちに聞く活動事例

行政が一方向的に提供するこれまでの整備では、市民の満足するサービス提供が難しくなっている。様々な場面で社会実験等により住民の意見を反映させながら整備を行う方法にシフトしつつあるが、その多くは、空間を構成する公共製品に、その意見を反映するまでには至っていないのが現状である。ベンチ等のストリートファニチャーのメーカーが社会実験を通じ、利用者から直接意見をくみ取り製品開発に反映させる取り組み事例について紹介する。

1 市民を対象とした公共製品の見本市の開催



伊藤 登

(株)プランニングネットワーク：代表
／PDC 監事／TDA 監事

■パブリックデザインコンソーシアムの役割

一般社団法人パブリックデザインコンソーシアム（PDC）は、新たな要請にこたえる公共空間の在り方を提案し、それを実現する制度、体制に言及するとともに、様々な豊かな公共空間創造に関する活動の一環としてこれまでシンポジウムやセミナー等の開催を行ってきた。

また、そのような空間の創造を保証する、公共事業に適用可能な、標準的な製品を開発することも、この集りの重要な役割

であり、会員メンバーであるデザイナー、プランナー、様々な分野のメーカー技術者などと連携し、リーズナブルな価格で質の高い豊かな公共空間を保証する製品を開発し、社会に提供する活動も行っている。

■公共空間を支える製品を取り巻く状況と展望

公共空間を支える製品は、市民が選ぶことができないものであった。また、多くのメーカーは利用者や製品が置かれる環境をあまり顧みることなく設計し、社会に供給していたといえる。また公共製品の市場は、毎年一定の需要があることから、技術革新や基準の改定等がなければ新しい製品を開発する動機が生まれにくいともいえる。

このような状況では、質が高く、かつデザインの優れた標準製品を供給できるのか疑問である。今や公共空間を市民に開放し、積極的に活用してもらう時代であり、タウンマネジメント組織等の市民組織が製品を選ぶ時代が来ると考えられる。市民組織が製品を直接選択するような時代の到来を見据えた製品開発のあり方が求められている。

■「三宿パブリックラウンジ」の開催

一般的な市場ならば、ブランド知名度や信頼度、選好度なども含め、様々な市場調査を実施して商品開発を進め、製品を世に送り出す。しかし、公共製品メーカーの商材（ストリートファニチャー、遊具等）は、建材展等の主にバイヤーを対象とした見本市はあるものの、実際のエンドユーザーたる市民を対象としたものはこれまでになかった。

PDCでは、公共空間を支える製品について、実際の空間で実際の利用者である市民による製品モニタリングを行う必要性を感じ、そのような機会と場所を探していた。今回、三宿四二〇商店会が世田谷公園で行うイベント「三宿さくらマルシェ」においてその機会を得ることができた。これがPDC主催の「三宿パブリックラウンジ」である。

「三宿パブリックラウンジ」の概要

○日時：

平成30年3月31日(土) 11:00～17:00

平成30年4月1日(日) 11:00～16:00

○場所：世田谷公園

○出展：6社14製品

うちベンチ・スツール9製品、ライト1製品、吸音製品1製品、ユーティリティ製品3製品



■市民の反応とメーカーの反応

出展商品は、数は多くはなかったものの、製品化されているもの、開発途上にあるもの、今回の企画のために参加メーカーが協働して作りだしたプロトタイプモデルなど様々であった。また今回の出展商品の多くは、ベンチ・スツールであったが、その素材は木材、スチール、ステンレス、コンクリートとバラエティに富んでいた。

当日は、出展メーカー担当者が中心となって利用者に対するアンケート調査を実施した。利用者は、デザインやベンチ等の配置の良さ、製品の面白さなどから、利用する製品を選択しており、使い心地などのベーシックな機能において概ね好評であった。また、ベンチ等を利用者が自由に配置換えして使えることも利用者に好評であった。これらのことから、可動式あるいは仮設的施設が新たな魅力を生み出す可能性を見出すことができた。

また、予想に反してグレーチングを座板に使ったベンチの利用率が高かった。これもこれまでにない面白い製品として認識されたことによるものである。

このアンケート調査では、メーカー担当者が自社製品、他社製品問わずに利用者の声を聞くこととした。メーカー担当者は他社製品に対する声を聞くことによって、実は多くのことを学べたはずである。

■PDCからのお願い

PDCでは、このような取組みをさらに多くの製品を対象として実施していく予定である。その際に必要となるのが場所の確保である。本紙の読者が道路や公園等の公共空間を提供いただけるならば、是非協力をお願いしたい。

2

賑わいを測る

社会実験の有用な活用のために

中野 竜

(株)コトブキ / TDA 理事



全国のあらゆる場所で社会実験が実施されている。

日本では2011年ごろから「人口減少社会」に突入したと言われ、人口も社会資本投資も右肩上がりであった時代の社会モデルは通用しなくなりつつある。日本だけでなく、世界の誰も経験したことのない社会の縮退に対し、パブリックスペースへの投資も従来路線の変更を余儀なくされ、効果的・効率的な社会資本投資のあり方の模索が「社会実験」という形をとって様々な場所で実施されている。

社会実験の定義は「地域におけるにぎわいの創出、まちづくりまたは道路交通の安全の確保等に資するため、社会的に影響を与える可能性のある道路施策の導入に先立って、関係行政機関、地域住民等の参加のもと、場所や期間を限定して当該施策を試行・評価し、もって新たな施策の展開と円滑に事業を執行することを目的とするもの」(国土交通省道路局ウェブサイト)とされ、新たな施策の本格導入の可否を判断するための材料として実施されるものである。つまり、社会実験の実施そのものが目的ではなく、社会状況にマッチした新たな施策を導入するための判断材料を得ることが大きな目的である。

■社会実験をどのように評価するか

社会実験を新たな施策導入の判断材料を得るために実施するとするならば、その施策の目的や目指すべき姿が明確になっていて、かつ、それが達成されたかどうかを確かめる必要がある。たとえば利用者の安全を目的とした施策導入において、「人出が150%増加した」とか「周辺店舗の売り上げが7%増加した」といった評価は意味をなさない。「ヒヤリハット件数が30%減少した」とか「車両の平均速度が5km/hr低下した」というような定量的な判断材料を得るべきである。

何を当たり前のことを。と思われるかもしれないが、「賑わい」のような抽象的な概念においては判断材料を何にするか、何を重要視して定量データを得るのが非常に難しい。

弊社で関与した賑わいに関する社会実験において収集した定量データは、環境条件、参加者の属性、人数、滞留時間、場所、ア

クティビティの種類などである。この他に利用者に対するインタビューや観察者そのものの感想など定性的なデータを加え、どのようにこの社会実験を評価するのか、というのは非常に難しい作業であり、あらかじめ実験の調査設計を行うことが最も大切な準備なのである。

■社会実験を地域活性化に役立てるために

行政団体やエリアマネジメント組織が実施する一部の社会実験では、残念ながら、社会実験と銘打ったイベントにとどまっているケースが散見され、せっかくの投資に見合う知見が得られないことがある。

社会実験には、前述のような「評価・判断」という側面があり、それが本筋であることは間違いないが、そのいっぽうで「近隣住民・来街者へのアピール・周知・合意」など、本格整備へのプロセスと捉えることも可能である。近隣住民との合意を得、事業を推進していくためには、住民やステークホルダーを説得するだけの評価や裏付けが必要であり、そのためには定量的な評価が不可欠であると我が社では考えている。イベントベースの社会実験であっても定量的データを収集することには大きな意味があり、それを見える形で公表していくことが、地域を巻き込んだエリアの活性化につながるものと考えている。

次に弊社で関わったいくつかの社会実験を紹介する。

■神田警察通り賑わい社会実験

2017年10月に神田警察通りと内神田から神田錦町にまたがるエリアにおいて、神田警察通り賑わい社会実験実行委員会(神田警察通り沿道整備推進協議会・UR都市機構)を主催者とする社会実験が実施された。この社会実験は2016年にも実施されており、この時には神田警察通り(4車線一方通行)の一部車線を規制して休憩施設を展開している。(写真1)



写真1：道路を1車線塞いで休憩施設を整備した。休憩施設全体を車道に置いた全国初の事例である。

2017年には、実験エリア各所に休憩施設やベンチを展開(写真2)し、利用者の実態調査や意向調査を行い、街なかベンチの可能性に関するエビデンスを得ること

ができた。2016、2017年ともに同じ調査フォーマットを使うことによって、両者の比較を行えるよう工夫している。



写真2：座る場所があれば地域の方も使うことがわかった。屋外にベンチが多いことは、外出時の安心感につながる。

■左近山団地

左近山団地は昭和42年に旧日本住宅公団(現在の都市再生機構)によって建設が開始された団地で、すでに50年程度経過していることから建物の老朽化や空室の増加、入居者の高齢化などの課題があった。このような状況を改善するため「左近山団地中央地区団地再生コンペティション2015」が実施され、熊谷玄氏の主宰する株式会社スタジオゲンクマガイが特定されたことは今号の「ランドスケープ事情」に詳しい。

弊社では新たに整備された広場の一角をお借りし、新設計したあずまや(写真3)を置いて利用状況の観察調査を実施している。コンペティションの目的であった多世代交流や子育て世代の流入促進などの目的に弊社製品を合致させることができるのか、その検証のための重要な機会と捉え、継続的な観察と同様の課題を抱えている場所や自治体への情報発信を続ける予定である。



写真3：ソーラーパネルで蓄電しながらドライミスト、Wi-Fi、USB充電ソケットなどを備えた新設計のあずまや。

■「賑わい」を定量化したい

この他にもいくつかの社会実験に参加する機会に恵まれた。特に道路(歩道)に休憩施設を置いて利用者の動向や意向を調査する手法は一般化しつつあると感じている。そのいっぽうで、この知見を生かすためには、同じフォーマットで計測し続け互いに比較し、蓄積した情報を発信する必要がある。社会実験の結果の有用な活用のためには、主観を交えた考察に加え、説得力のある数字の提示が重要である。

最終的には地域活性度合いを表した「にぎわい指数」を発明したいと思っている。

「北本市」その2

北本の雑木林



北本市の市街地には武蔵野の面影を残す雑木林が残っています。それらの雑木林の多くは、民地にも関わらず下草が刈られ、一般の人が散歩できるように散歩道が整備されるなど、保守管理が行き届いています。北本市観光協会では毎年春に「北本春の森めぐり」というイベントを、雑木林を舞台に開催しています。このイベントでは、北本の生活の中にある驚きや発見を、ツアーなどを通して体験してもらいます。具体的には子供や親子を対象とした、プレーパークやマルシェの開催、北本の旬めぐりガイドツアー等を開催しています。

観光協会では、市街地に残る貴重な雑木林を、北本の魅力を再発見する重要な観光資源と考えています。そのため雑木林が身近にある暮らしや、多様な存在価値を、実際に体験できる機会として、イベントを開催しています。雑木林の存在意義は社会的に認知されている価値ですが、私たちが雑木林に北本の魅力が詰まっている、象徴的な資源だと考えている理由は、雑木林の保守管理を行う、北本雑木林の会の活動にあります。

NPO法人北本雑木林の会は平成3年に結成された市民団体です。当時は市街地化の波に取り残され、役目を失った林が、藪やゴミ捨て場でうっそうとしていたそうです。代表の白川さんは、その

ような林が、北本の大切な資源になると考え、地主と交渉し仲間を集め、ボランティアでゴミ捨て等の清掃活動や下草狩りを始めました。その後、林が地域の資源として開かれた公園となるよう、市民緑地制度を活用し、地主や役所との交渉を続けてきました。また、雑木林の魅力を伝えるため、定期的な自然観察会の開催や100年の森づくりを掲げ、現在では、市街地に残る雑木林15か所のうち10か所を、会が保守管理を行っています。もちろん、雑木林の多くは民地の為、20年以上の活動の間に、保全してきた雑木林が宅地となって家が建っているところも少なくありません。それでも粘り強く活動し、雑木林の可能性を信じ、何より会の活動を皆さん本当に楽しそうに行っています。2016年には「北本春のもりめぐり」の舞台である「てづくりの森」で、北本初のプレーパーク「森と子育てのつどい（モリトコ）」がオープンし、毎月第3日曜日には子供たちの楽しそうな声が雑木林に響いています。

北本雑木林の会の活動には、他団体や積極的な人々を引き付け、有機的な活動のつながりが存在します。北本市観光協会では、雑木林の会のようなまちづくりのプレーヤーと一緒に、能動的にまちに関わる仲間を育てていくことが、次世代のまちづくりへとつながると考え活動しています。

景観ビジネス最前線



K・O・T・O・B・U・K・I

townscape.kotobuki.co.jp

日常の風景も、特別な1日も、
賑わいが「場の価値」を高めます。
左近山みんなのいわ

ホワイトボード

今号は「継続していく景観」というテーマで、景観と都市インフラ・メンテ/醸成した団地環境とそのコンバージョン/景観材料等へのエンドユザー意向汲み取り活動/公的空間で市民のアクティビティ解析から適正な製品を開発しようとするメーカーの

動き等に触れた。つまり時間が作った景観とこれから長い時間をかけて作り上げるべき景観はどうあるべきかを問うた。その号で、高橋徹氏の悲報をお伝えする事になるうとは思っても見なかった。残念である。改めてご冥福を祈りたい。



NPO法人 景観デザイン支援機構 事務局

私達は下記の企業・団体のご協力をいただいています。
 (株)昌平不動産総合研究所 / (株)住軽日軽エンジニアリング / 都市環境デザイン会議 / (株)コトブキ / (株)都市環境研究所

〒111-0043 東京都台東区駒形 1-5-6 金井ビル 3F
 Tel : 080-6722-4114 Fax : 03-3847-3375 E-mail : main@tda-j.or.jp
<http://www.tda-j.or.jp> <https://www.facebook.com/tda.public>

【編集：(株)アーバンプランニングネットワーク】2018061000